

イノベーション

イノベーションを誘発する仕組み

大学の知を活用して地域の活性化を

キーワード：地域活性化・センサー・バイオマス・地域連携

本事例の関係者
信州大学工学部長・地域共同研究センター長
長野県
長野県テクノ財団
善光寺平3市1村
JA長野開発機構
中小企業振興センター
コーディネーター
文部科学省産学官連携
コーディネーター

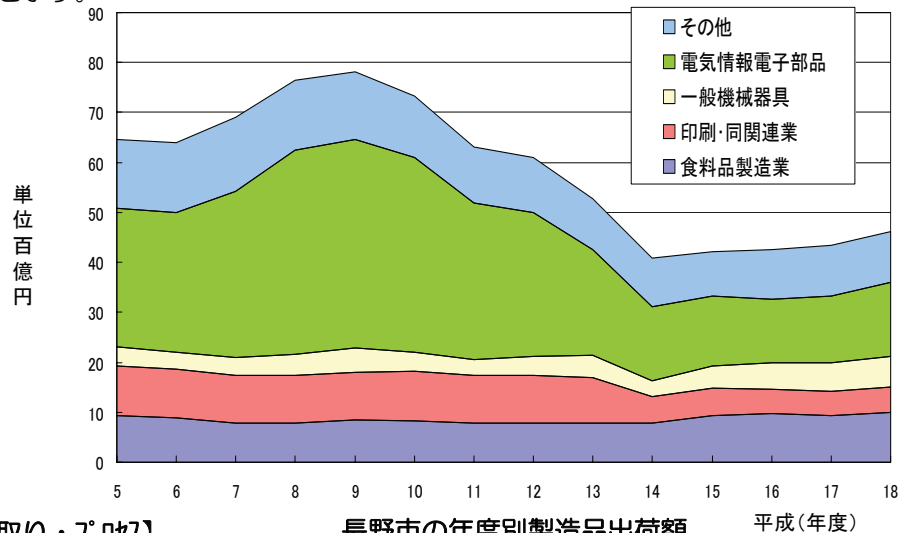
製造品出荷額が6割に減った善光寺平の活性化

【要約】

長野市の善光寺を中心とした3市1村（長野市・須坂市・千曲市・高山村）の平成17年度工業出荷額は、ITバブル崩壊前の平成9年に比べて約60%と落ち込んだ。危機感を抱いていた地域産学官連携関係者が「善光寺平活性化協議会」を立ち上げ地域再生をはかることとした。コーディネーターは中小企業振興センターコーディネーターとともに、工学部長および地域共同研究センター長を補佐し、大学の知を活用した新産業の創出を目指すために、自治体・団体・関係企業等を取りまとめ、平成19年度に善光寺平センサー研究会を、平成20年度にはバイオマス有効利活用（BMU）研究会を創立した。

【きっかけ】

平成18年10月、善光寺平3市1村主催で開催される「産業フェア in 善光寺平」のパネル討論会において、「9年前に比べ約60%に落ち込んだ善光寺平の製造品出荷額を、産学官連携により新たな産業を興し地域の活性化をはかろう」ということになった。下図に善光寺平の代表的な市である長野市の年度別製造品出荷額を示す。



【段取り・プロセス】

長野市の年度別製造品出荷額

当地域は「ナノテク・IT・材料」系・「環境バイオマス」系産業の集積地であることおよび信州大学工学部長指導のもとに、地域共同研究センター長・有志教員によって3つのバーチャル研究センター（環境調和型科学技術研究センター・スピンドバーステクノロジーセンター・超精密加工技術研究センター）が同時期に立ち上がったことを踏まえて、産学官連携による大学の知を活用した研究会を立ち上げ、地域産業復活の足掛かりとすることにした。

【成果・結果や活動後の変化】

平成19年4月、善光寺平センサー研究会（左写真の上）を立ち上げ、平成20年7月にバイオマス有効利活用（BMU）研究会を立ち上げた。各々研究分科会活動に付随したプロジェクトを立ち上げ、新産業創出を目指して活動中である。



上：善光寺平センサー研究会、下：BMU研究会設立総会

善光寺平活性化のために！

- 平成19年4月 善光寺平センサー研究会 創立
- 平成20年7月 バイオマス有効利活用（BMU）研究会 創立

成功の事例

地域企業の危機感が産学官連携を推進

●製造品出荷額が増加しないと、当地域は寂れる一方だ

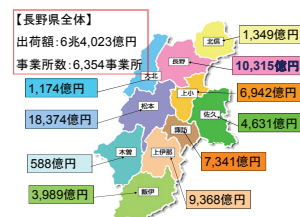
中国を代表とする新興工業国の製造能力向上・品質の改善という環境変化は全世界的な価格競争を引き起こした。この競争に打ち勝つために日本の製造企業の多くは中国などへ生産拠点の移転を加速させた。その結果、生産工場のあった地域は空洞化し、長野県善光寺平の3市1村も同様に産業の空洞化で苦しんでいる。

製造品出荷額激減を目の当たりにした自治体・企業経営者・大学が協力して地域の活性化をはかろうという機運が満ち、産学官連携の足掛かりができた。

●地域活性化の種は大学の知にある

当地域の産業構造は「ナノテク・IT・材料」・「環境バイオマス」・「精密金型産業」・「組み込みソフトウェア」等である。その中で、大学が得意とする分野は「ナノテク・IT・材料」・「環境バイオマス」である。工学部長は工学部内に新しく、「スピンドバステクノロジーセンター」および「環境調和型科学技術センター」を創立し、3市1村で構成される「善光寺平産業活性化協議会」による地域活性化政策にも、それら研究会を寄与させることとした。それを受けコーディネーターは大学の知を活用する研究会、「善光寺バレーセンサー研究会」・「BMU研究会」創生の支援をし、研究会活動を推進している。

イノベーション



長野県地域別製造品出荷額

成功と失敗の分かれ道

各自治体・企業・団体・大学は固有文化を持っており、各々その文化の塀を超えるのは至難の業である。お互いの文化を認め合うことが成功への道である。

失敗の事例

「報連相」はいつも念頭に

●「報連相」の漏れは組織の亀裂を招き、相互の信頼関係を歪める

善光寺バレーセンサー研究会・BMU研究会とも研究会創立までの過程で「時には停滞し、またある時は後退」した。その原因は「報告・連絡・相談」の漏れが主であり、「自治体・企業・団体・大学の方針変更など」が原因になることはほとんどなかった。

文化が異なる産・学・官で構成される研究会創生には、同一文化を持つ一団体の研究会創生に比べて、①意思決定に至る道のりの違い②意思決定に要する時間の違いなどがあるので、それらを「より深く観察」し、「確認」し、「漏れ」が無いように進めなければ、停滞や後退を招くことになる可能性があることを十分留意しておきたい。

●報連相の原点は「切れ目のない情報交換」から

人と人との信頼関係は情報交換から始まるので、切れ目のない情報交換を心掛けないと思わぬ落とし穴に落ちることもある。

産学官連携の新たな展開に向けた提言

大学の知を地域活性化の核とするために

●大学の实力を知る

科学技術に対して大学も万能ではない。コーディネーターは支援先大学等が他大学等に比べて優れている分野・劣っている分野など、しっかり認識する必要がある。例えば、繊維（ファイバー）を集中的に研究する学部は信州大学にしかない。

地域の産業界の得意分野と大学の得意分野の知を合わせることで、初めて地域イノベーション創生の芽ができる。

●コーディネーターの力は知っている

「自治体・団体のコーディネーター」・「特許流通アドバイザー」などかなりのコーディネーター、アドバイザーが地域で活動している。

新設された「全国イノベーション推進機関ネットワーク」を視野にいれ、これらコーディネーター・アドバイザー等のネットワークを形成し、協力して地域イノベーションをはかるべきである。

☆コーディネーターの一言

少なくとも県レベルで、大学等の産学官連携機構を構築し、国・自治体・団体・大学等のコーディネート人材のネットワークをつくり上げ、協力して地域の活性化をはかるべきである。